



エビネ(海老根) 2009年4月27日撮影

ラン科・多年草・花期-4~5月・丈-30~40cm

森が明るくなったせいでしょうかキンランは以前より多く花を咲かせ、ギンランも何本か美しく咲き誇っていました。このまま増えることを願っています。

エビネを1本見つけましたが心無い人に盗掘され残ったのはシャベルの跡だけ、以前はたくさんあったそうですがまた0本になり残念無念です。

● 苗のときは小さな球根ですが、大きくなると球根も大きくなり、小さな球根から大きな球根へと一本の糸でつながれたように並ぶ姿が、“海老”の背中に似ている、それでこの草を“エビネ(海老根)”と呼ぶようになりました。エビネは種類が多く、改良された園芸品種がたくさんあるそうです。写真のものはどこにでもあるヤブエビネという植物ですか?・・・地味な花ですね。(田崎)

ハンショウヅル(半鐘蔓) 撮影5/4

キンポウゲ科・多年草・花期-5~6月 茎がつる状に伸び花が半鐘の形に似ているところから“ハンショウヅル”の名前がつけました。森に何本かありますが低木からみつき、今年は植生調査地でかなりの花を咲かせていました。(田崎)



コナラとクヌギ

4月に芽吹いた木々の葉は黄緑や淡い緑色でしたが、今や深い緑色に変わっています。今回の樹木はこもれびの森の主演であるコナラ、クヌギです。両者ともブナ科コナラ属で、北海道西南部から、本州、四国、九州に分布する落葉高木で日当たりの良い山野に普通に見られます。

ともに雌雄同株で花はこもれびの森では4月に葉と同時に開花し、新枝から垂れ下がります。用途はシイタケの原木になるほか家具材、器具材などに、葉や果実、樹皮を染色に用います。

同じ科、属のコナラとクヌギですがその違いは、まず樹皮はコナラは灰黒色、クヌギは灰褐色でともに縦に不規則に割れるがコナラは裂け目の間に平面があり、クヌギは裂け目は深く平面はありません。

コナラの葉は先の方で葉幅が広く最大になり、鋸歯が粗くて大きいのが特徴です。

ミズナラやナラカシワの葉もコナラとよく似ていますが葉が大きく、葉柄の長さがごく短いので見分けがつかず、またコナラの葉が最も小さいのでコナラの名があり、ミズナラをオオナラという地方もあります。

クヌギの葉は長楕円状ですが、アベマキやクリとよく似ています。その違いはクヌギは葉裏が薄い緑色で鋸歯の先が白っぽく、クリは葉裏が淡緑色で鋸歯は先端まで緑色です。

果実(ドングリ)はコナラは長楕円形でその年に熟し、クヌギは球形で翌年の秋に熟します。

昨年、東北地方を旅行した際、大規模なナラ枯れの状況を見ました、緑の山が無残にも褐色の虫食い状態になっていました。被害発生地は昔の薪炭林であり、今や樹齢40年以上の大木の森林でした。

こもれびの森も同じ状況であり、高齢化したコナラの萌芽更新が難しくなっており、これまで経験したことのないこもれびの森の歴史が始まるような予感がします。(林)



コナラの樹皮



クヌギの樹皮



コナラの葉



クヌギの葉



上: コナラの果実



右: クヌギの果実
(上;1年目、下;2年目)



木もれびの森の野鳥たち

—— 6・7月、野鳥たちは子育てと

巣立ちの時を迎えて ——

繁殖のために南から渡ってきた夏鳥のキビタキ。フルーツのようなさえずりを森に響かせ、5月のひとときを楽しませてくれました。

6月、木もれびの森で子育てをしているシジュウカラ・メジロ・エナガ・コゲラ・アオゲラ・ムクドリ・ヒヨドリは、ヒナたちの巣立ちが始まっています。

早々と巣立ちをしたエナガの子供たちはにぎやかな群れになって、クモなどのエサを見つけながら飛びまわっています。

シジュウカラのヒナたちはニーンニーンと甘え声で親にエサをねだり、スズメもシリシリシリと親が運ぶエサに大騒ぎ。巣立ち後も、しばらくは親の側で自力で生きるための学習です。

シジュウカラの1年間に必要な虫は 10 万匹を超えるとか。それを支えてくれる森があってこそ、命を育むことができるのですね。

——4月・5月、渡り(移動)の

途中で立ち寄った鳥たちは——

キビタキ オオルリ センダイムシクイ エゾムシクイ アトリ マヒワなどでした。エサ・水分などの補給、休憩などをして繁殖地へ向かいます。(瀬尾)



キビタキ♀



キビタキ♂



コゲラ (頭の赤い毛が♂の印)



アオゲラ



エナガ



アトリ



オオルリ♂



オオルリ♀



センダイムシクイ



エゾムシクイ



マヒワ♂

森からの手紙

道の上や、木の枝先に不思議な葉っぱを見た事ありませんか？

葉がくるくると円筒形(他の形のものもあります)に巻かれています。オトシブミと言う甲虫の仲間のしわざです。体の長さは1cmにもみたくない小さな虫です。体のわりに頭が小さくておかしい格好をしたものが多いです。

オトシブミのメスは、葉を巻き中に卵を産みつけます。巻いた葉をすぐに切り落とすオトシブミと、木の枝にそのまま付けておくものもいます。

巻いた葉を揺籃(ようらん)と言います。卵や幼虫にとって食糧兼隠れ家となる、ゆりかごです。我が家の庭の3年物のコナラに毎年ヒメクロオトシブミがやってきます。葉選びから始まりすどい口で葉を噛み切り、葉がしおれるのを待って折りたたみます。途中で卵を産みつけ、また葉を巻きます。全行程を見ていたら2時間ぐらいかかりました。あんな小さなお母さんが作ったゆりかご、感動ものでした。

少しだけゆっくり歩いて、森の中でオトシブミの揺籃見つけてくださいね。

名前の由来:「落文」直接言えない事を手紙に書いて伝えたい人の近くの路上に落としておく文の事。

昔は巻紙に手紙を書いたので、オトシブミのつくる揺籃が落文のようだと言うのでつけられました。(高橋)



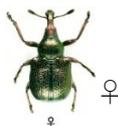
♀



ミヤマキョウキョウ (コナラ)



♂



♀



ハマキョウキョウ類 (エノキ)
図はドロハマキョウキョウ



エゴツルクビオトシブミ(エゴ)